

ルードルフ・カスナー『変身』について：訳者解題 として

小黑, 康正
九州大学

<https://doi.org/10.15017/26525>

出版情報：九州ドイツ文学．25，pp.49-59，2011-10-12．九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：



ルードルフ・カスナー『変身』について

訳者解題として

小黒 康 正

一 観相学者

ルードルフ・カスナー（一八七三—一九五九）は、宇宙的存在論とも称すべき壮大な独自の「観相学」を展開したオーストリアの思想家である。現チエコのモラヴィアに生まれ、ヴィーンとベルリンの大学で学んだ「観相学者」は、ホーフマンスタール、リルケの友人であり、リルケ『マルテの手記』の成立には大きく関わり、ジツド、メーテルランク、ジンメル、ハウプトマン、ヘリングラー、シュラー、トーマス・マンなどと親交を結び、パスカル、スターン、キルケゴールに自らの精神的始祖を見いだし、優れた語学能力を駆使してジツド『フィロクテート』、プラトン『饗宴』『パイドロス』『イオーン』、ゴーゴリ『外套』、トルストイ『イワン・イリノイチの死』、ドストエフスキー『大審問官』、プーシキン『皇帝のモルル人』等をドイツ語に翻訳し、早くからインド思想の影響を受け、晩年には日本の禅に多大な関心を示す。このような多彩な精神的遍歴と、ヨーロッパ各地・北アフリカ・インド・ロシア等への実際の歴訪とを通じて、カスナーはモラリスト・プラトニカー・ミイステイカー・フィジオグノミカーとして、詰まるどころ西欧合理主義に対する「異端の正統者」として、独自の精神的営為を展開し、その成果を上梓した。

参考までに、主な著作（ならびに邦訳文献）を示す。

- 一九〇二年 『死と仮面』（塚越敏訳、法政大学出版局、一九七〇年。但し、邦訳は短縮された一九五六年版に基づく。）
- 一九〇三年 『インドの理想主義』
- 一九〇六年 『音楽のモラル』
- 一九〇六年 『モティーヴェ』

- 一九〇八年『メランコリア』（塚越敏訳、法政大学出版局、一九七〇年。但し、邦訳は短縮された一九五三年版に基づく。）
- 一九一〇年『ディレッタンティズム』
- 一九一一年『人間の偉大さの諸要素について』（塚越敏訳、法政大学出版局、一九七〇年）
- 一九一三年『インドの思想』（小松原千里訳、『神戸大学教養部紀要論集』四四号所収、一九八九年）
- 一九一四年『キメラ』
- 一九一九年『数と顔』
- 一九二二年『観相学の基礎』
- 一九二三年『エッセイ』
- 一九二五年『変身』
- 一九二七年『魂の神話』（小松原千里訳『魂の神話・ナルチス』に所収、国文社、一九八九年）
- 一九二八年『ナルシス、あるいは神話と想像力』（小松原千里訳、『魂の神話・ナルチス』に一部所収、国文社、一九八九年）
- 一九三〇年『観相学的世界像』
- 一九三二年『観相学』
- 一九三六年『想像力について』
- 一九三八年『神人』
- 一九三八年『直観と観察』
- 一九三八年『思い出の書』
- 一九四六年『第二の旅』
- 一九四六年『変容』
- 一九四七年『十九世紀』（小松原千里訳、未知谷、二〇〇一年）
- 一九四九年『歳月の回転』
- 一九五一年『キリストの誕生』
- 一九五三年『内面の国』
- 一九五六年『魔術師』

一九五七年『黄金の竜』

リルケはカスナーについて述べる、「彼は同時代の他の人々が持っていない何かを持っていたのです。そして他の人たちに成功しなかったことが、彼にあって成功したと言わなければなりません」と。また、ホフマンスタールによれば、カスナーの「この種の作品は、精神の網の目の濃い密度のために、すぐには理解されることはない。おそらくそう遠くはない、後の時代になってようやく人々は、驚嘆して思いを新たにすることだろう。新しい内容と新しい形式をあれほど求めていたわれわれの時代が、このような新しい形式に盛られた新しい内容に気づかなかったことに」。「カスナーに関する両詩人の言及は、小松原千里「解説——『魂の神話』を中心に」(ルードルフ・カスナー『魂の神話』、小松原千里訳、国文社、一九八九年、一五二頁以下)に基づく。」

カスナーは一九五三年にオーストリア国家賞、一九五五年にシラー記念賞を受賞、さらに同年、語学文学ドイツ・アカデミー会員、美術バイエルン・アカデミー会員に推挙されるなど、生前、高い評価を得た。また、カスナー没後一〇年目の一九六九年から一九九一年にかけて、ネスケ社より『カスナー全集』全一〇巻が順次刊行され、カスナーに対する評価はますます高まったと言える。しかし、現在では、ウーヴェ・シュペール著『世紀転換期のドイツ文学における神無き神秘主義』(一九九七年)やゲルハルト・ノイマンならびにオト・ウルリッヒ共編による論集『ルードルフ・カスナー 知の形式としての観相学』(一九九九年)、また日本におけるカスナー著『十九世紀』の翻訳(小松原千里訳、未知谷、二〇〇一年)など優れた労作はあるものの、総じてカスナーは、日本は言うに及ばず、オーストリア本国ならびにドイツにおいてもいわば忘れられて久しい。このような状況の中で、カスナーの精神遍歴が最晩年に向かった日本において、私たちが「他の人たちに成功しなかったこと」を見きわめ、「新しい形式に盛られた新しい内容」を新たに繙いていくことは、意義あることではなからうか。

二 『変身』成立史

ネスケ版『カスナー全集』第四巻に所収された『変身』は、元々は、一九二五年三月、ライプツィヒのインゼルス社より一巻の単行本で同名にて公刊された著作である。但し、同全集の注(四一七七—一以下)によれば、これより先に、同書の一部が次に挙げる雑誌において予め掲載された。

- (一) ルードルフ・カスナー「顔」、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール編『Eranos』一九二四年二月一日号所収（ミュンヘン）。掲載項目「誘惑者」「現代の不平等家」。
- (二) 「ルードルフ・カスナーによる顔」、エフライム・フリッツシュ編『Der neue Merkur』一九二四年二月号所収（シュトゥットガルト、ベルリン）。掲載項目「銀行家*氏」「この顔、あの顔」「ファウヌス」「肉」。
- (三) ルードルフ・カスナー「顔」、[navigate necesse est] アントン・キッペンベルクに捧げる記念号（一九二四年五月二二日号）所収（ライプツィヒ）。掲載項目「中心」「無思慮な男」「暴君」（一九二五年版所収の「淫蕩な男」と同一内容）「ナルキッソス」。
- (四) ルードルフ・カスナー「観相学的研究」、[Das Inseichrift] インゼル社の愛読者向け雑誌』一九二四年クリスマス号所収（ライプツィヒ）。掲載項目「ローレンス・スターン」「フリードリヒ・ニーチェ」「ブッダ」。
- (五) 「ルードルフ・カスナーの意味と特性」、エフライム・フリッツシュ編『Der neue Merkur』一九二五年一月号所収（シュトゥットガルト、ベルリン）。「あとがき」の事前公開。

また、一九二五年の単行本公開後、同書の一部を再録した文献も併記する。

- (六) ルードルフ・カスナー「変身 ライナー・マリーア・リルケの思い出に」、ルードルフ・カスナー『魔術師 対話と寓話』所収、オイゲン・レンチュ社（チューリヒ、シュトゥットガルト）、一九五五年。大幅な変更を伴う短縮版で、「あとがき」を欠く。再録されたのは若干の変更を伴う次の一九項目「中心」「無思慮な男」「淫蕩な男」「勝負師」「誘惑者」「現代の不平等家」「この顔、あの顔」「ファウヌス」「肉」「母」「正面と側面」「ナルキッソス」「インスピレーション」「幸福」「男根崇拜（*侯爵）」「太った男と痩せた男」「死者の国あるいは黒人王の口」「斜めの人」「ブッダ」。
- (七) ルードルフ・カスナー「最も偉大な者 著作選」、アマンドゥス社（ウィーン）、一九四六年、掲載項目「現代の不平等家」「音楽家」「ブッダ」。

トゥルン・ウント・タクスイス侯爵夫人 (Fusün Marie von Thurn und Taxis、カスナーとリルケの共通の友人、一八五五—一九三四) がリルケに宛てた一九二三年一月四日付けの手紙によれば、『変身』本文三四項目のうち一五項目はこの頃すでに出来上がっていた

ようである。右記雑誌(一)(二)(三)に一部が掲載された後、残りの項目は一九二四年九月六日に、そして「あとがき」は同年一月一七日に出版社に渡された。そして、雑誌(四)における三項目、雑誌(五)における「あとがき」の事前刊行を経て、一九二五年三月に単行本が上梓されるに至る。「あとがき」の事前刊行は、カスナーが出版社宛に出した一九二四年九月六日付けの手紙と同年一月一七日付けの手紙に基づく。なお、カスナーは一九二四年九月六日付けのヘルベルト・ビスマルク宛の手紙で「あとがき」を「観相学の芽生え」*physiognomischen Durchbruch*と名付けている。

一九二二年に公にされた『観相学の基礎』が比較的よく世に受け入れられたこともあり、カスナーは一般読者における「観相学」への関心が更に高まることを期待し、『変身』の発行部数として五、六千部を見込んだ。しかし、インゼルの社主アントン・キッペンベルクは発行部数を二千部にとどめる。実際、一九二七年二月の時点で、インゼルの倉庫には一九一五部が残っていた。このことに関してカスナーは出版社宛てに書いた一九二七年二月一日付けの手紙において次のように嘆く。

極めてグロテスクであり、他のどの民族ではあり得ない、いやそれどころか、考えられない話だ、『変身』が百部も売れていないとは。内容の難しさなど妨げにならないということを、あくまで示すはずだ。『数と顔』より難しいもの、私の作品中で『変身』よりやさしいものは、何があるのか。

このように『変身』が一般読者にあまり受け入れられなかったこととは裏腹に、リルケは、タクスイス侯爵夫人にパリから宛てた一九二五年一月二三日付けの手紙によれば、献辞をことのほか喜び、また、同年二月一日付けの手紙によれば、パリからミュンヘンに戻った一九二五年の冬、多くの晩を『変身』を読んで過ごし、「本を開くたびに新たな重なりと驚きが立ち上る」と記していた。我々が『変身』を繙き、そこから新たな観相学への理解を深めれば深めるほど、リルケによる詩的世界の根幹に行き着くことは、決して偶然ではない。

三 『変身』における「観る」こと

カスナーの「新しい形式に盛られた新しい内容」は、一九〇〇年、カスナーがベルグソンの『身体の精神に対する関係についての試論』の読了を契機に観相学的研究への関心を深めていく中で本格的に始まり、『メランコリア』(一九〇八年)と『人間の偉大さの

諸要素について』（一九一一年）において礎が築かれ、執筆に三年を要した『数と顔』（一九一九年）において更なる広さと深さが獲得され、『観相学の基礎』（一九二二年）において広く一般読者に受け入れられ、その後、『観相学』（一九三二年）においていわば総決算が図られた。ここに示された本邦初訳の『変身』（一九二五年）は、さまざまな具体例が示された『観相学的研究』と思想的背景をエッセイの形式で記す「あとがき 意味と特性」とからなり、二つの主著『数と顔』と『観相学』の中間に位置するように、カスナーの思想的展開におけるまさに中間決算に他ならない。

カスナーの『観相学』は、アリストテレスを嚆矢としラーヴアーターによって大成された従来の観相学とは、根本的に質を異にする。カスナーは、「あとがき」第二章に記したように、古典的な観相学を支える顔と意味との一対一対応に対して否定的判断をくだす。

ラーヴアーターが観相学において言語を超えて世界を解釈しようとし、こうした試みが、ラーヴアーターの心を支配し、その頭脳を占めていた照応という静的世界像に最終的に行き着いてしまうことを、私たちはラーヴアーター観相学の過ちとみなす。それでラーヴアーターにとって意味は結局、内奥と表面との乖離にならざるを得なかった。ラーヴアーターが世界を深く解釈しようとするほど、それは詰まるところ、世界はますます平板になってしまうか、そうならざるを得なかったのだ。

ラーヴアーターは、『観相学的断章』において人間のさまざまな顔を解釈し性格を導き出す際、スウェーデンボリ（スウェーデンの哲学者、宗教家、一六八八―一七七二）の心身照応論に基づきながら、実証科学的な観相学を新たに構築した。しかしながら、内と外との照応という考えは、カスナーにとつてあまりにも「平板」であり、「あとがき」第九章の言葉も援用すれば、「本質として劇的ではなく、ピュリタンの」と言えよう。更に「あとがき」第一〇章には、「皮下観相学の意味しか持ちえない心理学」という言葉がある。詰まるところ、カスナーにおけるヨーロッパの伝統的観相学に対する否定は、顔を分析し類型化することへの嫌悪であり、数的処理に終始する実証的心理学に対する反発であり、帰する所、因果律に終始する合理的思考への拒絶に他ならない。カスナーの主著『数と顔』を踏まえて言えば、数として処理された人間の顔はいわば「顔」ではなく、「役者の顔」、すなわち「仮面」にすぎない。なお、カスナーは「仮面」に関してすでに『ディレッタントイズム』や『人間の偉大さの諸要素について』の中で独自の考察を行っているので、補足説明が必要であろう。カスナーにとつてディレッタントは、単なる好事家や趣味人を指すのではなく、いつであれ時代の中にいるあまり時代を超越できず、全体とその連関を自らの内に欠くゆえに節度を持たず、内的にも調和を持たないゆえに思

慮を欠くその場かぎりの存在である。それ故に「人間の偉大さ」を有しない。「偉大さ」とは、カスナーの観相学では、同一性 (Identität) に基づく「顔」の世界にあり、個性 (Individualität) に基づく「仮面」の世界には存しない。

神々の「幸福」は同一性であり、幸福な世界は同一性の世界ですが、これに対して個性それ自体は乱れて割れたか、もしくはプラトン哲学的だと常にみなされなければなりません。(「全一性(ある手紙から)」より)

カスナーによれば、人間はかつて幼年期に「同一性の世界」にとどまっていたにもかかわらず、成長とともに「幸福な世界」から離れ、次第に「個性の世界」で生きようになる。同様に、総じて人間存在は、近代以降、外とのつながりを失い内的にも分裂に陥ってしまった結果、古典古代の人間存在とは異なり、「仮面」の世界に生き、「同一性」の世界を知らない。こうした近代人の生は、個人主義を信奉する現代人、とりわけ現代のディレッタントに、それもその「仮面」において凝縮される。特にこうした「仮面」を見る際、考察対象は、客体として見られる単なる顔や容貌だけではなく、認識主体の視覚そのもの、更には見る行為から生じる幻視 (Vision) にまでも及ぶ。つまり、カスナーの観相学的研究は、ラーヴァーターのそれとは異なり、ドイツ語 *Gesicht* が有する一切の次元を含むのである。従って、たとえ「仮面」であっても、その背後には、主体と客体、内と外とが会合し「顔」がなくてはならない。このような認識に基づく観相学は、ラーヴァーターのそれと快を分かちながら、因果律に終始する近代の合理主義を批判し、同時に自らの実践において近代の超克をめざす。その重要な試論が「変身」と言えよう。

新たな観相学は、カスナー五二歳時の著作が十分に示すように、静的世界像にも、実証的な数的処理にも基づかない。考察対象は、類型化される単なる顔ではなく、一つでありながら全てを包括する「顔」、「あとがき」第六章のことを援用すれば、「人間のドラマ、ある者の変身」である。ここで言う「ドラマ」とは、連続する時間の中で生の「リズム」に基づいて人間存在が繰り返すたびに示す一回性の「変身」に他ならない。こうした変化ないし運動こそが、「あとがき」第九章によれば、外と内、身体と心、心と精神の間で生じるドラマ、つまり「全一性の唯一可能なドラマ」として、カスナー観相学の基盤をなす。但し、このような動的な世界認識は人間の悟性的認識に対応する悟性言語で本質を衝くことができないはずだが、それを敢えて言語表現に置き換えようとするならば、総じて撞着語法と化す。

現象の背後にあるもの、形而上学的存在、エロス、反転、全一性 (All-Einheit) は (中略) 統一であると同様に分裂であり、ある

いは統一の中の分裂であり、分裂の中の統一である。（「あとがき」第一〇章より）

「全一性」は、「ヘン・カイ・パン」という全にして一を意味する汎神論的世界観もしくは宗教的神秘主義の概念であり、元々、古代ギリシアの自然哲学に端を発し、スピノザにおいて十全に展開する。しかし、カスナーは自身の観相学的「全一性」とスピノザの汎神論的「神即自然」との同一視を拒む。

全一性は直観の根底であり、根底そのものとしてしか意味をもたない。それだけに私たちが全一性について語るのは汎神論者としてではない。スピノザの神即自然 (*deus sive natura*)、すべての汎神論者の逃げ道は、概念としてはまったく中身も意味もなく、エホバの変装として初めて意味を得る。（「あとがき」第九章より）

ここでの「意味」*Sinn* は、世界の現象一切に万物の内在的原因である神を、あるいは所産的自然 (*natura naturata*) に対して能産的自然 (*natura naturans*) を認めることではなく、直観を通じて得られる内と外との合一である。このような合一はカスナー観相学の眼目であり、前述のとおり、それは「顔」において表現されながら変容し続ける動的な関係であって、分析によって固定化される静的な照応関係では決してない。このような眼目について、カスナーは同じく「あとがき」第九章において次のようにまとめる。

従ってねらいは、全一性という唯一可能なドラマが、外と内、身体と心、心と精神の間でドラマが生じることであり、このドラマによって観相学全体の内容が私たちの言う意味で形成されるのだ。

そもそも「あとがき」は、「内は外にあり、外は内にある。つまり、両者の統一は、極めて厳密に言えば、我々が意味と名づけるものである」という冒頭が示すように、内と外的一致を「意味」として定義づけることから始まった。また「あとがき」第九章の冒頭によれば、通常の意味が「出来事 (*Geschehen*) の世界」に属するとすれば、それと対置される観相学的な意味は「表現 (*Ausdruck*) の世界」に基づく。カスナーにとって、内と外的一致、全一性の状態にある人間のみが、「出来事の世界」ではなく、「表現という反世界」に至り、「意味」を表現する。「出来事の世界」が数として処理された「仮面の世界」であり、「表現の世界」が「偉大さ」を生み出す「顔の世界」であるだけに、「あとがき」副題「意味と特性」における「と」の内実をここで述べておくと、すべての特性は

「顔」において「意味」として「表現」されなければならない。従って、「意味」は「出来事の世界」を形成する因果関係によって捉えることはできない。

内と外との関係は因果関係としてではなく、直覚 (Intuition) によって、つまり直観 (Anschauung) と観入 (Ein-sicht) によって把握されなければならない。〔あとがき〕第四章より)

二〇世紀初頭のドイツで成立展開したゲシュタルト心理学では、事物が他との連関で働く事態の構造を見通す「洞察」として、*Ein-sicht* は解された。これに対して、時代的に重なるカスナーの観相学では、ベルグソンからの影響を受けただけに、一事態の構造を見通すことにとどまらず、むしろ、ディルタイの構造概念に近く、生の全体連関もしくは構造を「観入」*Ein-sicht* することが問題となる。カスナーの観相学では、「想像力」*Einbildungskraft* という最重要概念がまさにそうであるように、外から中へ方向あるいはある状態への到達を意味するドイツ語前綴り *ein-* は、常に特殊な働きをなす。

精神的な意味で入り込む (*eindringen*) とは、どういうことなのか。ある存在の無限を捉えることですが、但し、それができる者は、極めて遠く離れたものの合一を心得ている者、見たところ最も小さなものを明らかに最も大きいものと、私たちに重要とは思えないことを重要と認められているものと、最も身体的なもの (このような最上級が使えるとしたらですが) を精神的なものと結びつける術を心得ている者しかない。(「全一性 (ある手紙から)」より)

カスナー観相学は、結局のところ、従来の観相学とは異なり、一個人における内面と外面の連関に終始するのではなく、壮大な広がりを持つ内と外の合一に問題が行き着く。

もし人間の想像力が (ギリシア風に言えば) 神々の創世的な想像力に関わっていないとするならば、直覚は存在しないであろう。〔あとがき〕第四章より)

カスナーにとって「想像力」*Einbildungskraft* とは、何らかの像 (*Bild*) を心の中で漠然と思い浮かべる力ではなく、自己の中に「意

味としての像」Sim-Bildを作り入れ (einbilden) ながら事物と交わる力に他ならない。その際、認識する主体と認識される客体との相互作用が瞬間的に働く。人間が事物を外から中へ引き入れることで事物を変えたと同時に、事物はそのものに入り込んだ人間を瞬く間に変えてしまう。このような本質交換は、事物に深く沈潜しようとした友人リルケの詩的世界にも多分に認められるが、カスナーにおいては、「表現の世界」であり、観相学的「意味」であり、「変身」の内実である。

畢竟するに、「精神的な意味で入り込む (eindringen)」ことが「観入」Ein-sichtである点において、別言すると、視覚に基づくキリスト教的神秘主義を背景に有するという点において、やはりカスナーは西欧合理主義に対する異端の正統者となろう。このことは、既に名前を挙げたキルケゴールやベルグソンからカスナーが多大な影響を受けたことだけを意味しない。カスナーが自らの精神的始祖を「反対対立の合致」を唱えたニコラウス・クザーヌスの神秘思想にも見出していたことは間違いない。一九二三年の小論「文学の最も深い意味 (ボードレール『悪の華』について)」で「反対対立の合致」が言及され、一九三〇年の著作「観相学的世界像」においてフォン・キュスとして初めて名前が挙げられたが、一五世紀ドイツの思想家に関する言及は全著作においてわずかに六度にとどまる。しかしながら、カスナー観相学の思想的起源として、神を意味するギリシア語 *theos* が *theo* (私は観る) に由来するというクザーヌスの語源説が挙げられよう。クザーヌスにおける視覚的営為が感覚的に「見る」にとどまらず、精神的に「観る」ことも含意し、更に「人が神を観ること」が同時に「神が人を観ること」を意味するという神学的見解は、カスナーにおいて事物をめぐる哲学的・観相学的見解に変容しているとはいえ、認識する主体と認識される客体との相互作用に痕跡をとどめる。

また、カスナー観相学における重要概念であり、「変身」においても頻出し、主として「尺度」、文脈によつては「節度」と訳さざるをえなかった *Maß* もまた、神秘主義的伝統に基づく。例えば、「二つの小品 獣の尾」の中には、次のような記述がある。

人間の言語は個々の感覚の分化にあり、分化とともに置かれている。個々の感覚器官、口と鼻、目と目など、人間の顔にあるこれらの間の空間はなんと表現力に富み、意味深く、尺度 (*Maß*) の世界全体ではないか！

また、愛国主義者であり雄弁家であるとする伯爵の顔について、「惑星と彗星」の中で次のように述べる。

どこであれ節度 (*Maß*)、落ち着き (*Gemessenheit*)、自制、品格があり、どこにも熱狂もしくは誇張がない。ただ口だけがある程度全体の節度を超える。口から聞き手の耳や諸感覚へと流れ込む、豊かに、深く、温かに響く偉大なことば故のこと。

尺度でもあり節度でもある語 *Mass* には、カスナー観相学の「精神」的営為が凝縮する。但しここでの「精神」は、クザーヌスの語源説に依拠して述べれば、神から吹き込まれた精神としての *spiritus* ではなく、*mensurate* (測定する、計る) を語源とし、人間精神の能動的働きを意味する *mens* に他ならない。このような神秘主義の伝統に基づいて、カスナー観相学は、他者ではなく自らを「尺度」として自己 (*Selbst*) を「計る」こと、言い換えると、「節度」や「落ち着き」を通じて自己と同一化することを求める。しかし、このような同一性は、既に述べたように、人間の成長とともに、あるいは人類の発展とともに、失われてしまう。肝要なことは、失われた同一性を再び獲得することであろう。自分自身を「尺度」として自分を「計り」ながら自己と合一すること、そして同時に「想像力」によって内と外とを一つにすること、以上の「精神」的営為は、すべては顔を「観る」ことから始まる。

参考文献

- ・ Rudolf Kassner: *Die Verwandlung*. In: ders.: *Sämtliche Werke*. Bd. IV. Im Auftrag der Rudolf Kassner Gesellschaft herausgegeben von Ernst Zinn und Klaus E. Bohnenkamp. Pfullingen: Verlag Günther Neske 1978, bes. S. 771ff.
- ・ Rainer Maria Rilke und Rudolf Kassner: *Freunde im Gespräch. Briefe und Dokumente*. Hrsg. von Klaus E. Bohnenkamp. Frankfurt am Main 1997.
- ・ Hugo von Hofmannsthal und Rudolf Kassner: *Briefe und Dokumente samt ausgewählten Briefen Kassners an Gerty und Christiane von Hofmannsthal. Mitegetit und kommentiert von Klaus E. Bohnenkamp*. Freiburg im Breisgau u. Berlin 2005.
- ・ 田代崇人「カスナーの観相学的世界像」、九大独仏文学研究会『独仏文学研究』第一三輯（一九六三）、四七頁以下。
- ・ 塚越敏「解説」、ルードルフ・カスナー『メランコリア』（塚越敏訳、法政大学出版局、一九七〇年）、三五八頁以下。
- ・ 小松原千里「解説——『魂の神話』を中心に」、ルードルフ・カスナー『魂の神話』（小松原千里訳、国文社、一九八九年）、一五一頁以下。
- ・ 小松原千里「解説」、ルードルフ・カスナー『十九世紀』（小松原千里訳、未知谷、二〇〇一年）、四八一頁以下。
- ・ 八巻和彦『クザーヌスの世界像』、創文社、二〇〇一年。
- ・ クザーヌス『神を観ることについて 他二篇』、八巻和彦訳、岩波文庫、二〇〇五年。